

院外茶話

vol.158 令和2年3月1日

観光旅行に修学旅行

団体旅行は名物料理に記念写真

旅は一人で思うまま

自分一人の名所に行こう

旅に行こう —旅行と旅—



新幹線の駅はどこも似たような形になって

はっきりした目的をもって出かけるのが旅行。目的が曖昧なまま出かけるものを旅と言う。一旦決めた旅行は予約のキャンセルが大変だけど、自分一人の旅ならば、ただ行かなければいい。もちろん大雑把な区別だから、その境目ははっきりしない。

旅行と言えば修学旅行に社員旅行、観光旅行などは大勢で出かけるもの。団体旅行の目的ははっきりしていて、定番はディズニーランドに阿波踊り、カニ食べ放題や紅葉狩り。様々な商品のパンフレットが用意をされている。

旅行者はそのうちの一つを購入して、当日指定の場所に集まれば、後はお任せ。見るもの食べるもの、土産店までパックになっているので、日程表のままに動けばいい。

代金は驚くほど安くて、海外旅行でさえも近隣の国ならば1万円を切るツアーがある。

その昔、あこがれのハワイ旅行は30万円もしたというから、ものの価値とは変わるもの。大卒の初任給が2万円もしなかった頃のことである。



カニ食べ放題と言えば山陰

一方で、息のつまるような日常から一瞬でも離れてみたいとか、都会にはない空気を吸ってみたいとか、気持ちの安寧を求めて住処を離れるのが旅。旅とは本来孤独なもので、何であれ一人一人の思いが籠る。

旅の場合はサンプルが用意されていないから、行動の計画は全て自分で作らなければならない。では、どこに行こうか。

芭蕉の後を追いかけて、おくの細道を歩くのもよい。

日の丸みかんを求めて四国の清流を渡れば、どこも澄み切った水がきれい。

別段京都でなくてもいいのだけれど、何となく京都に行ってみる。「そうだ、京都に行こう」なんて言いながら。

実際、私は織田作之助の夫婦善哉を読んで法善寺横丁に行った。

祖父が度々身延詣でをしていたと聞いて、身延山久遠寺にも行ってきた。

日本一の豪雪地域は新潟の六日町。その日は聞きしに勝る豪雪で、私に宛がわれた1階の部

屋は、完全に雪に埋もれて暗いだけ。寒い1日を過ごしたことがある。

こうしていろいろな場所を飛び回るのもいいけれど、何年かに1度同じ場所を訪れてみれば、少しずつ変わる風景を眺めて、時の流れを旅することができる。変わりゆく心のなかで、今一度過去を振り返ることになるが、この場合、嫌なことはなるべく忘れて、記憶に多少化粧を施すと、心地よい旅ができる。

ただし、自分探しとか言って中東に行った若者が殺されてしまったことがあったけど、何につけ限度を超えてはならない。



こんな駅には多分ポストもない。

団体旅行と一人旅。大いに違いはあるけれど、どちらも必ず出発をした場所に帰ってくるもの。帰らないのは旅行者というより、流れ者と言われる。

フーテンの寅さんの場合、二度と帰らないと言い残しては見るけれど、いつかは帰ってくるので、これもぎりぎり旅の範疇だろう。

そもそも日本人はいつ頃から旅をするようになったか。残っている詳しい記録で最も古いのは土佐日記。

「男もすなる日記というものを女もしてみむとてするなり」

あまりにも有名な出だしだけど、作者の紀貫之はなぜ女のふりをしたのだろう。理由はわからないが、土佐の国司として数年間、任期を終えた紀貫之が、京都まで帰る道中の出来事を綴ったものである。

土佐から京都まで55日間を要したと言うが、路が整っていなかった時代の旅は船の移動。海が荒れれば同じところに留まって、毎日接待を受ける。それは宴と和歌のやり取りで、今の接

待よりはよほど高尚だけど、昔も今も高級官吏の旅とはこんなことになるのかな。

これまで飢饉など、特別の場合を除いて、庶民が移動することはなかったが、平安の終わりから鎌倉の時代に入ると、全国を巡礼する僧侶が現れた。四国の巡礼は、弘法大師の後を追った旅で、真言宗が広まった頃から始まって今に至る。

この巡礼という言葉は聞こえがいいが、流行り病や、罪を犯して家に留まらなかった者も多くいて、それは行き倒れを覚悟の旅。中には家を持たない職業遍路もいて、当時旅とは決して楽しいものではなかった。

ところが江戸時代になると参勤交代が始まって、旅籠ができて、庶民の暮らしも少し豊かになれば、お伊勢参りに金毘羅参り。東海道中膝栗毛は弥次さん喜多さんが、お伊勢参りの道中を記した当時人気の滑稽本。旅は生活上の必然や宗教を離れて、庶民の娯楽となった。

これを読んで実際お伊勢参りに行った人がどれくらいいたかわからないけれど、今でいう旅ガイドやインターネット当たる。私も旅に出かけるときはインターネットを調べるけれど、列車や飛行機の時間、ホテルの予約まで始めると一泊二日の旅と同じくらいの時間がかかる。

実際に出かける頃には疲れ果てて、電車に乗っても新鮮味をお感じない。だから、私は調べない。

旅の行く先は一瞬の思い付き。そうだ！春は讃岐に行って、瀬戸内の海でも眺めてみよう。唐に渡る最澄が通った海で、弘法大師もその船を眺めていたかもしれない。そしてついでにうどんでも食べてこよう。

場所が決まれば、後は日にちを決めて旅行社に行く。これでOK。



ときどきこれが食べたくなる。